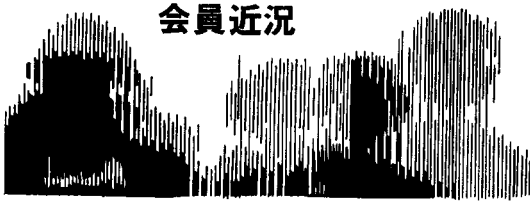


会員近況



新潟大学
理学部数学科 田中 謙輔

学習理論よりOR理論への挑戦 以前私は北川敏男先生のもとでヤ・ゼ・チブキンによる一連の論文を中心に学習理論を研究しました。その後彼の学習理論についての思想が数冊の書物にまとめられています。現在彼の最初の大著“制御系における適応と学習”の訳本を北川先生と共同でほとんど完成いたしました。(共立出版より近日発売予定)

この書物では不完全情報のもとでの最適制御理論は学習理論によって克服できることが彼の統一思想でまとめられています。この中で扱われている理論は不完全情報のもとでのゲーム理論、信頼性理論、フィルター理論、在庫管理理論、パターン認識理論、制御理論等であります。

不完全情報のもとでのOR理論、とくにDP理論ではベイズ理論を用いる方法がありますが、このような状況はまだ事前情報が存在している状況で本当の意味の不完全情報の状況ではないように思います。もっと事前情報の少ない状況では学習理論的方法で、OR問題の最適解が求められるのではないのでしょうか。しかし私の才能不足で皆様に報告できるような良い結果がだせるかどうか分かりませんが挑戦してみる価値はあると思います。これからも皆様方のご指導助言をお願いいたします。

東京都立工科短期大学 小田中敏男

DP研究会だより 学会の動的最適化部会は昨年3月をもって、解散したがDP研究会として研究活動を続けてきた。12月は八王子セミナーハウスで1泊2日のDPシンポジウムを開催した。この催しはもう今回で通算5回ほどになる。出席者8名全員が発表するという活発さであった。氏名と発表題目はつぎのとおりである。沢木勝茂(南山大) マルコフ決定過程の国際会議に出席して、

蔵野正美(千葉大) Stochastic game について、有水瀧(林業試験場)水質汚濁への提言、三笥武(国鉄技研)DPの代数的構造、小田中敏男(都工大)管理図と確率的パンパン制御について、坂口実(阪大) Equilibrium point in a game related to the best choice problem, 安田正実(千葉大)、中神潤一(千葉大) Min-max value of one period inventory problem. (以上) 今後は学会発表の予備的検討を中心として研究会を運営すること等を討議し、恒例の忘年会を開き実り多いシンポジウムの最後を飾った。

筑波大学
社会工学系 高橋 肇郎

OR学会員数が伸びなやんでいる、ということをしぼしばし聞きます。会員を増やすことだけがORの使命とは思えませんが、やはり会長の言われるように2000名そこそこでは少なすぎるといことは誰しも感じます。会員増強の一つの方策として銀行、生保などのいわゆる事務屋さんの分野へのOR普及に努力を注いだらと思われます。この分野では企業評価、現金在庫管理、支店支所の評価基準の作製など、多変量解析などの統計解析と合わせてORの手法への期待が随分あることを、最近までありました早大システム科学研究所におけるビジネスシステム企業教育の経験から、痛感している次第です。

東亜電機システム部 李 圭一

昨年の秋に長女が生まれ、私も父親になってしまった。その子はなんとなく子豚に似ているが、私にはかわいいもんです。

ところで、最初にORに出会ったのは京大の修士のところで、数理計画や最適制御理論の美しさにふれて、それ以来頭から離れません。現在、確率的計画法、パラメータ推定およびそれらの結合問題の勉強をしており、理論ばいものに興味があります。それらは、今のところ仕事には役立ちそうになく趣味のようなものです。

最近、確率的計画法について思うことは、従来、この方面では、二段決定問題に帰着させる方法、確率制約を用いる方法などがあるが、各係数の確率的性質を与えて解の確率分布を求めよ、という問題設定もあっていいのではないかと思ひ、現在は毎日確率密度などを求めることはかりをしております。ところで、これらは自分1

~~~~~  
人でしているものですから、1人よがりにならないものかと心配し注意していますが、発表会などでご批判を大いに受けたいと思っています。

三菱電機  
中央研究所業務部 小池 将貴

2月初旬に東京から関西に赴任してまだ2カ月に満たない。研究管理システムの開発という新しい仕事に戸惑いながらも、統計解析の側面からアプローチしてみようと闘志を燃やしています。

休日は、京都二条城、六甲山、神戸ハッサム邸などの名所旧跡を、通勤用バイクを流用してめぐっています。この原稿を書いている今は、桜がようやくホコロビかかっていますので、来週は、能勢の山奥にある常照皇寺のしだれ桜を観にいこうと思っています。

研究管理というこの Fuzzy System を扱うには、性急に白黒を決めるのではなく、ジックリと腰を据えて取り組みたいと思うこの頃です。

北海道大学  
経済学部経営学科 関口 恭毅

手持ちの問題を一定の方式で入力すると、「分岐法は××、選択法は△△、……、とするアルゴリズムで、規模○○なら△秒で解ける」という出力が得られる。このようなソフトウェアをアルゴリズム・ベースとよぶ。

組合せ型問題に興味をもっていますが、会社での3年半の経験から考えて、個々の問題に対する解法の提案を積重ねても、それが現場での解法として利用される可能性はきわめて少ないと思われる。これは問題とその解法を検索することの困難さに帰着されると考えています。

幸いにして組合せ型問題の解法には木型探索の一種と理解できるものが多いので、この種のアルゴリズムの一般的モデルを作成し、その構成と効率の関係を調べる作業をここ数年続けています。まだ多くの課題が残っていますが、現在ではアルゴリズム・ベースに近いものが実現可能であろうと考えています。

多くの既存のアルゴリズムを集成し利用の便を図る技術の研究がもっと盛んになることを希っているのですが、会員諸兄はどうお考えでしょうか。